

Title	慶應義塾図書館蔵『新編覆醤集』について
Sub Title	
Author	林, 望(Hayashi, Nozomu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1977
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.36, (1977. 3) ,p.208- 221
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	森武之助教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00360001-0208

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾図書館蔵『新編覆醬集』について

林

望

現在慶應義塾図書館に所蔵する『新編覆醬集』八冊は、通行の延宝四年刊本に比して、幾つかの興味ある特異性を有するので紹介する。

最初に書誌を掲げる。

(1)寸法、タテ二十六・七厘×ヨコ十七・九厘。

(2)装釘、丹色菊花紋空押行成表紙(改装)。浅葱色包角。美濃紙袋綴。第三冊以下各冊表紙左肩に原題簽。第一、二冊は書題簽(後補)。

また各冊表紙中央に墨書目録外題貼付。天地断截あり。

(3)構成。全八冊。内七冊印本。一冊写本。

第一冊。序、年譜、凡例、正集目録。

第二冊。正集卷一～卷四。

第三冊。続集序、続集目録、続集卷一及卷二。

第四冊。続集卷三～卷七。

第五冊。続集卷八～卷十二。

第六冊。続集卷十三～卷十六。

第七冊。附録目録。附録卷一～卷三。

第八冊。拾遺(写本)。

(4)題籤。子持杵録題

第一冊・第二冊。「新編覆醬集」(書題籤)

第三冊～第六冊。「新編覆醬集」

第七冊。「新編覆醬集附録」

第八冊。「新編覆醬集」

(5)内題

△正集▽「新編覆醬集(卷之一～卷之四)」

△續集▽「新編覆醬集(卷之一～卷之十六)」。△附録▽「新編覆醬集附録(卷之一～卷之三)」△拾遺▽「新編覆醬拾遺」

※「拾遺」には目録は無いが、前三者については、目録大題は内題に同。

(6)尾題

△正集▽序、年譜、凡例、なし。目録「新編覆醬集目録終」。本文「新編覆醬集卷之一(～四)終」。△續集▽序なし。目録「新編覆醬集目録終」。本文「新編覆醬集卷之二(～十六)終」。ただし卷三、四、十四、十五の四巻は卷付の「之」字なし。△附録▽目録なし。巻一「新編覆醬集附録卷之一終」。巻二「新編覆醬集附録二終」。巻三「新編覆醬集附録三之巻終」。△拾遺▽なし。

(7)柱刻

△正集▽序「新編覆醬集 総序(序・後序)(丁付)」。年譜、凡例、目録「新編覆醬集 年譜(凡例、目録)(丁付)」※ただし、年譜第六第七、及び凡例第一第二の計四丁は「新編覆醬集」に誤る。本文「新編覆醬集 卷一(～四)(丁付)」△續集▽序、目

録「新編覆醬續集 序(目録) (丁付)」。本文「新編覆醬續集 卷一(十六) (丁付)」。△附録▽目録「新編覆醬續集 附目録(丁付)」。卷一「新編覆醬續集 附録一」※ただし第五丁、第八丁卷付の「一」を欠く。卷二「新編覆醬續集 附録卷二」。卷三「新編覆醬續集 附録卷三」※ただし第九丁、第十二丁(大尾)は卷付の「卷」字なし。△拾遺▽「新編覆醬集 卷」(巻数丁数なし)。(8)版式。四周单边。無界。匡郭寸法二十・三糧×十三・七糧(第一冊首丁オに於て)

(9)行格(「拾遺」に就ては別に掲げるので略す)。総序、每半葉五行各行十字。序(昌三) 每半葉六行各行十三字。(以下略記する) 叙

(三竹) 六行、十四字。後序、六行、十二字。年譜、九行、十八字。本文(含目録、凡例) 十行、二十字。

(10)刊記 なし。

(11)印記

各冊首丁オ「北固山／西源禪院／卍字堂」木瓜形朱印。「慶應義塾圖書館印」方形朱印。第一冊、第七冊、第八冊首丁オに「桂春書室」方形朱印。第一冊、第二冊、第八冊の首丁オ「幽軒」(白文)「主人」(朱文)朱連印。

(12)識語等

第一冊目録奥に「明治七年甲戌五月偶入鄙之次此集八冊有書肆一見而求焉／現桂春瑞月山叟誌之／圖 圖」(上印は「緇門／慧瑞」白文方形朱印。下印は「月山」朱文方形朱印)。

また第一冊表紙見返しに「讀石丈山集」と題する林鷲峰の七絶一首を貼付けてある。更に、附録卷三(第七冊)十一ウの余白に「讀石丈山集」(右に同じ作)並びに「石丈山乗牛圖」と題する林鷲峰作二首を墨書してある。ただしこの附録卷末書入の方は「拾遺」の筆者と同筆にかかるものと認められる。

(13)その他

全卷(除「拾遺」)に汎って朱筆を以て処々訂正してある。これを第一朱とする。これとは別の朱筆で全体の可成な部分について句点、朱引を施してある。これと同じと見られる朱墨を以て、正集の一部眉上に評語等の書入れがある。これを第二朱とする。こ

れらとは全然別の第三朱もごく稀に存するが、これは漢字の音訓等を示すに止まり、特に論ずるには及ばないであろう。第一朱、第二朱については以下に詳述する。

本書々誌は、右の通りであるが、今本書の特異点を整理すれば、次の三点に集約されようかと思う。

(一) 無刊記である

(二) 朱筆書入れ

(三) 『拾遺』なる写本の存在。

右の三点を以て、本書の他本に比しての著しい特異性を認め得るのである。以下條々これを述べる。

(一) 無刊記であること。

通常『新編覆盤集』は、縹色若しくは香色表紙を原裝とする十四冊を以て行われているのであって、管見の限りでは(※注①)すべて同板と認められる。そして、これら通行本は『附録』卷三の巻尾に「延寶四丙辰歲三月吉且刊行」という刊記が付けられてあるが、今本書に於ては、この刊記が無く、その位置に尾題が存する。これは通行本には無いものである。これは、本書が刊行本でない為に生じた特異点である。即ち、結論からいえば、本書は刊行に先立って版元に於て校正の為に試印された下刷本である。それを證明するのも、校正の朱筆の存在である。前述の如く、本書には主たるものとして二種の朱が加えられてある。その一は校正朱であり、第二は『拾遺』筆者による加筆であるらしい。今、この二者に就て一々截然と區別するのは仲々難事であるが、比較的明白なものについて校正朱であると思われるものは全部で少くとも二三七ヶ所に上る。これらの内には、校正箇所を朱で訂し、尚眉上に○印又は何らかの校語を書入れたものが多いが、或は行間、欄脚に○印等を附したものの、全く無印のものなどを含んでいる。これらの訂正のうち、二十ヶ所については直っていないが、残りの二一七ヶ所については、通行の刊本に於て朱筆の通りに訂正がなされているのである。一例を示せ

ば、凡例第一丁柱刻に「新編覆醬集」と誤つたのを、朱で「續」に○を附して眉上に「集」と校語を記している。刊本「新編覆醬集」に直っているのを見る。或は、年譜第九丁ウ七行目に「此役神君麾下」とある役の下に○を附し、眉上に「神君る上へアグベシ」と指定してあるが、刊本では、神君以下埋木をして行を改めている。かかる例を見るが如くである。この一事を以て本書が上述の如き性格のものであることを證するに足るであらう。即ち、この校正刷の段階では刊記はなく、そこに尾題が刻されてあったのを、刊行に際して尾題を削除して、刊記を入木したものと見える。

尚、本書は天地断截があるが、これは相当早い時期に施されたものであらう。二種の朱の内、第一朱校正朱の方は時に上部を欠くことがあるが、第二朱の方はそうしたことはない。これを思うに、版元の手から校正済の試印本が第二朱筆者の手に渡る段階で天地を断つて製本したものであるらしい。そして、この第二朱筆者の手で『拾遺』一冊が付加されて、その後如何なる経路を辿ったものか明らかでないが、とにかく龍安寺塔頭たる西源院の蔵書となつていたものが、近代に入つて識語の筆者「現桂春瑞月山叟」なる人物の手に落ち、(この人物に就ては、その何人であるか今の所不詳である。) 結句本塾の書庫に入つたものである。尚付言すれば、現在の装釘は、ごく最近に施されたものであると認められる。(「幽軒」「主人」の如く読みなされる連印の主に就ても今知るところがない。)

(二)書き入れに就て。

扱、第二朱による眉上及び行間の書き入れに就てであるが、これは筆蹟よりして「拾遺」筆者に同筆と認むべきものであらう。これに就ては後で詳しく述べるが、筆者は石谷清成という人物である。第二朱による句点朱引は統集にも散見する所であるが、しかし評語、批點、略注、改竄、校異、などの書き入れは、正集の全四巻に限られる。内容は丈山の詩篇に対する批評が主なものであって、評者としては、陳元賛、黄槩山僧(法名を明らかにしない)、林羅山、菊軒(これは恐らく朝鮮学士権試であらう)、雪堂董翁(長崎羈客とあるのみで詳らかなことは分らない。)といった名前が見えている。この外、稀に典拠を示す注記も存する。次に校異であるが、これはその対校に用いた異本が何であるかを考えてみる必要があらう。ここに『新編覆醬集』に先立って二巻本『覆醬集』というものが

ある。「覆醬集」全二巻は、寛文十一年、未だ丈山在世中に刊行されているが、この二巻本に収められている詩篇三百五十三首のうち、十二首は『新編覆醬集』編纂に当って採用されていない。然して残余の三百四十一首は『新編覆醬集』の『正集』巻一―巻四、及び『続集』巻十六に収録されてあるが、この兩刊本を比較すると、その可成な数の作品が改題若しくは改作されているのを見出すのである。この改作改題が丈山自身の意になるものか否かは今俄かに断定し難いが恐らくは丈山の意志であつたろう。ともあれ、この慶應義塾蔵本に「異本」として校異を示してあるのは、この寛文十一年刊本であろう。

(三)拾遺に就て。

これは他の印本と甚だ性格を異にする写本であるから、今改めて独立に書誌を掲げる。

寸法・装釘は印本に同一。題簽「新編覆醬續集」(刷題簽)。目錄外題「覆醬續集／拾遺」(書外題)。内題「新編覆醬拾遺」。尾題なし。四周单边。無界。板心「新編覆醬集 卷」(匡郭及び板心は本集に同じ木板刷である。但し柱刻に卷付及び丁付の数字はない。匡郭寸法二十・六纏×十三・九纏)。行格、叙・每半葉六行各行十三字。凡例及本文・每半葉十行各行二十字。全紙数四十八丁。内墨付四十一丁。巻頭遊紙一丁。巻尾六丁は匡郭板心のみ存する白紙。前の書誌に記載の諸印の他、本書には叙文末署名に添えて「桮直／之印」(朱文・方形朱印)。「子方／父」(白文・方形朱印)、又同じく凡例の末に「桮直／之印」(白文・方形朱印)。「子方／甫」(白文・方形朱印)の各印が捺してある。筆蹟は二筆である。叙から四十丁表七行目まで第一筆。以下四十丁表八行目から四十一丁表一行目(大尾)まで第二筆。全篇に汎って訓点附。処々第一筆による語註が眉上に存する外、主に人名などの略注が第二筆によって施されているところが散見する。全篇に朱墨を以て句点、朱引、校語、批圈を施す。これも第一筆と同一筆と認められる。(ただし、巻尾第二筆の処は、朱引あるも別朱。)

序文を左に全文掲げる。

新編覆醬拾遺叙

抑國朝之盛也、儒林之文藻、名家之詩英、各以鳴世者、雖不悉其人、於詩壇之鈐鍵、文苑之樞機、多涉獵祖述之勤、尤疎也、故益擇而取舍之、則詩乖格律、文匪純粹、而悉(1才)不足為法、何可不擇之哉、台嶠隱士徵君石丈人者、為人剛直、而自有個儻非常之標、素不娶妻妾、不媚權貴、不好華麗、不接塵囂、實以潛退為志、操從耳順之歲、巖棲台麓之一乘寺、杜扉謝客、唯仙境(1ウ)靜儉高尚、而以自居、古希之比、詠瀨見小河之和歌一首以降、再不渡鴨川、再不入雜邑者、三十稔于茲、時人貴其曠達、嗚呼是希代之真隱、丘園之逸老也、非所謂與實隱偽隱同日之談也、丈人天性嗜(2才)詩賦、花晨月夕、感時序、摸風景、恒所其著作、知李杜之精妙、而用李杜之精妙、間有不滿其意者、不許化之電屬、一一句一字辨擇推敲、而至三句、鍛月鍊點、窺塗抹者、抵死不休息、是以篇々什々、意周而語諄也、(2ウ)秀逸之奇句、警拔之確對、往々得其妙、全令無斧鑿之痕、後來擬作者誰髣髴丈人、所謂清詩要淘鍊、乃得鉛中銀者、余於丈人見之、是以平生跋涉於李庭杜園、滌筆于歐瀾蘇潮、而共不多讓者、中葉以(3才)來唯丈人而已、且又擅隱逸之秀于扶桑、揮著述之美於中華、誠天縱之才、調、間出之豪雄也、其証往年朝鮮暇、使詩學教授權菊軒稱以為、日本之李杜、外國之人推獎若是、誰為不當乎、時輩執抗(3ウ)衡、丈人之履歷、已顯然于輿人之叙、文行狀年譜墓碑等、何添蛇足、余自三弱齡、好丈人之清律、詩聯也、文章也、手簡也、筆談也、隨見隨聞、無不接目、逾月歷歲、簡編成堆、足以為三詩之軌範、丈人沒後、門生(4才)石子復編纂殘藁、號覆醬總集、頃日鳩刻既成、寔不朽之盛事也、嗚呼子復此舉、可謂於師之業、靈承厥志、剴勵氏某寄一部于余書室、欣然、略展閱之、則廓心胸、滌塵垢、悉是泉石之談、嚮是合所、余綴輯(4ウ)以藏于家塾之寫本、參互校訂之、則詩簡共漏於新刻、本者數十篇、於是、余惜其有殘缺、憾其不總集、拾其遺採其餘、乃起摘補之筆、以為一小策、附三其後、名曰覆醬拾遺、自以此以往、每有一詩、索出得(5才)者、逐次積累、以充拾遺之數、則豈啻丈人之素志而已哉、詩林之美、譚可併想矣、時延寶四年歲舍丙辰仲秋上澣禮尚堂人

子方叙

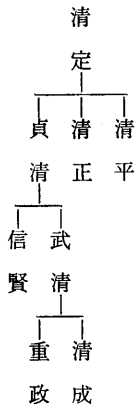
團 團

(右文中一部仮名を改めた。例えば「ノ」↓「シテ」、「E」↓「トモ」の如きである。)これを要するに、自分は年少の頃から丈山に私淑して、その作物を何によらず収集して居った処、今や一つの堆を成す程になった。ところにこの度石克子復(通称石川孫十郎)の手によつて『覆醬總集』(『新編覆醬集』)のことであるが、或は書名初案か。)が刊行された。これを自分の家塾に蔵する写本に比較するに脱漏せるものが少くない。そこでこれを惜んで『拾遺』を編む、というのである。尚、凡例を見ると、「丈一人少一壯之時、所作之詩賦文章等、無舊稿三者多々、余今無如之何惜哉、故略餘數葉以連々欲追加之也、從來幸卷尾良盈、則可下脩續々集以繼子復之編思此在茲」とその意氣の壮なる処を述べているが不幸にして、遂に本篇の巻尾盈つるを得なかつたこと現在見る通りである。

右の叙文等の執筆者埜直子方なる人物が本書の筆者(第一筆)であつて、本書はこの子方の自筆稿本であろうと認定し得る。然してこの埜直子方なる人物は本名石谷清成といふのである。『新編覆醬集』卷六ノ八オに「酬答石谷清成所寄」と題した一篇があり、その題下に註して曰く「一名直字子方稱松洞、親衛校尉貞清土入翁之適孫也」とある。(尚、序文末にこの所を引用した全然別筆の付箋が附せられてある。)今『寛政重修諸家譜』によつて、系譜並に略伝を示すと次の通りである。

。卷八百九十・八百九十一

石谷(藤原氏爲憲流)



(女子は省略)

清成「三大夫。萬治二年八月十三日はじめて厳有院殿（家網）にまみえたてまつる。時に十一歳。元祿二年八月五日父にさきだちて死す。年四十一。妻は禰原左衛門職信が女。後妻は稲垣信濃守家臣稲垣十左衛門重章が女。」

即ち江戸初期の江戸町奉行として歴史上にその名を留めている土入石谷貞清の孫に当るわけである。

『續集』巻六に、丈山が清成に酬答した一首は次のようなものである。

珠玉揮毫暉ニ老眼一研覃可勉少年時

後一來欲ニ克兼ニ文武一試看張華勳一志詩

前後より推して、この作は寛文四年の正月頃に作られたものと考えられる。時に丈山八十二才。清成ははまだ十六才の少年である。かかる作物の存在よりして清成が丈山に私淑しつつその作品を蒐輯したという理由は領かれるのであるが、もともと丈山は、清成の祖父貞清やその兄清正と旧知であった。その関係で清成に対しても、恰かも孫に対するが如き慈味掬すべき一首を贈ったものらしい。同じく『續集』巻九に「挽石谷宗淳居士序」と題する比較的長文の挽詞を寄せているのを見ると、丈山とこの石谷氏との浅からぬ交情が窺われる。曰く

（上略）居士少吾五歳矣、初同吾儕仕晉于伏見于／東照宮寵遇不輟賞賚蓋够、當時縮ニ金一石交ニ而還、凡贖於五十年所、中間辱從莫一府移居駿陽、接閭鄰舍相去步一武、牆屏有隣往來無時、平生之懽不特其意、金蘭薄一中膠漆之堅、疇容ニ謗一吻爲云々

これは、清正に就てその好誼を叙した部分であるが、この後の処で弟貞清にも少なからぬ紙幅を割いてその武勇功業を称賛しているのである。無論、この類の文章特有の美辞麗句も入ってはいるであらうが、彼等が決して浅い交りでなかつたことは確かであらう。尚又、この外にも、たとえば『續集』巻十四の「答一壘靜軒」(野間靜軒あて書簡)の中に「(上略)石谷氏來、知何日哉、宿處何地哉云々」と石谷氏に会えなかつたことを残念がっている処が見える(六才)。この書簡は年月明らかでなく、又右の「石谷氏」が誰であるかも判然としないが、いづれにせよ、清成に近い縁のあるものであるに違いない。

かかる環境にあり、また未だ少年の身でありながら丈山大先生より親しく詩賦を贈られた事もある清成が、先の叙文の中で「詩一聯也、文一章也、手一簡也、筆一談也、隨一見隨一聞、無一不撰一輯之、逾一月歷一歲、簡一編成一堆云々」と述べたのは、決して大げさな言いぶりとは思われない。然して清成は本集の刊行を指して「寔不朽之盛事也」などと言ひ、恰かも他人事の様に持てあつかつてゐるが、これはそのままには信ぜられまい。按うに、清成自身必ずや何らかの形でこの出版事業に関与してゐた筈である。さなくば何故校正用の試印本が彼の手に落ち、又、匡郭と柱刻を本集と同じくする料紙を用いて『拾遺』の如き稿本を編むことが出来たろうか。今となつては、その間の詳らかな事情は知るに由ないが、清成が丈山にとっては或種の弟子の如き人物であつて、しかも膨大な資料を有してゐたとするならば、彼が編纂スタッフの一員であつたと考える方が寧ろ自然であらう。

私は、ここに「北固山／西源禪院／卍字堂」の印形の有るを怪しんで、何か関連がありはせぬかと考えた。この北固山西源院は、竜安寺の一塔頭であつて現在までその名号は存するのであるが、然し、現在の西源院はもと宜春院と稱してゐたものであつて、往時の西源院は廃寺となり、保存せる資料等も昭和三年の火災に遭うて灰燼に帰したとのことである。従つて、この方面については今や知る術も無いことは致し方ない。（*注②）結局、清成と本集の刊行との關係については未だ詳らかにしないが右の推定は大方誤りないであらうと考へる。

扱、この『拾遺』に収められてある内容について述べておきたい。整理すると下の如くである。

(イ) 詩篇 七十三首

この内には「或云大拙翁詩、出扶桑雜記」と註されてある二十四首、また巻尾別筆の「洛東八景」、或は印本の方に見えている詩篇の異伝（若干の異同がある）などが含まれる。

(ロ) 書簡 二十九篇

(a) 林羅山、菅玄同、武田爰淵、吉田素庵ほか数人に宛てた書簡二十七篇

(b)『續集』に既に収載された書簡文中の脱漏を補う断章二篇。

(イ)林讀耕齋による丈山詩篇の評文十五章。

これはすべて『續集』卷二所収の詩に就て讀耕齋が評したものであるが、これについては凡例で「讀耕林一子所評之十五首、已載之本集、今又雖似三重出、然間文字異同、且又、品評之詳、批點之與、壘、静、軒、有異同、為使見者優劣着眼也。」と断つてある。ただしこの詩評は『讀耕先生全集』（*注⑨）の『讀耕林先生外集』卷十九として既に梓行せられて居たものである。

(二)詩の断句 三種

この内には、年譜中にも誌されて夙に有名な「白鷗不_レ停_二野_一水_二」や「欲_下將_二簑_一衣_二曝_レ返_一照_二、釣_一竿_二還_レ是魯陽_一戈」などが含まれる。

(ホ)和歌 五首

この内には、長頭丸の作一首、木下長嘯子の作一首が含まれる。余三首は丈山作。

(ハ)和文一篇

これは「先生燕居の西壁に凸凹窠十二景を倭文に書て貼してあり。誰か作をしらす。潜に騰写して帰りぬ。或日先生の作かと問へは去人か來訪の次に書写して推ぬとて名はいはれぬほとに先生の作にもやと思ひ書付ぬ」と前書きがあり、なお後書に「とあり最風流のわさなんめり。背の山人の作と云人もあり。いつれか是なる事をしらす。野間氏にとへともしらぬといひ、平岩氏も同前なり」と書き加えてあるもので、凸凹窠十二景を和語にやわらげて折込んだ擬古的雅文である。

(ト)その他

「辛未正旦試毫銘」一篇

「題_二明石神廟壁_一」一篇

「迂、海嶋、辞」一篇

「詩法正義跋」一篇

『拾遺』中の作品を整理すると右の通りであるが、これらが凡例で「拾遺編纂之例、不詳其年月、則不能悉定其次序、況又、流落於世間者、往々搜索他方以欲増補之、則不能更以類分之、詩文和歌共混雜拾遺之中、見者其擇之」と断つてある如く、混然一書を成しているのである。今、このうちの詩篇について一言付言する。

丈山生前の刊行にかかる寛文十一年刊二卷本『覆醬集』には総数三百五十三首の詩篇が収められてある。そしてその内十二首は『新編覆醬集』には採られていないこと前述の通りであるが、この不採用の十二首の性格を検するに(イ)権儀以外の朝鮮使節(金東濱)の作物一首。(ロ)「皆山亭」関係のもの六首。(ハ)その他五首という様に分類出来る。右の「皆山亭」についてはよく知らないが「皆山亭曰東新門跡之別館」と註されている(注*④)とところをみると東本願寺に關係したことであろう。大方の御示教を乞うものである。然して、上の(イ)を除く十一首が『拾遺』七十三篇の詩篇中に含まれている。即ち次の諸篇である。

「園中口占」

「用石蜜并梅花贈相国峯長老戲繼春初之韻」

「中元夕入本願寺觀燈花」

「乙亥中元之夕在洛戲為」

「訪黙々翁遺蹟」

「庚寅九月既望奉陪皆山亭賞月」

「皆山亭高僧新門跡和一章」

「寅再嗣既望月之夜之前韻奉酌答皆山亭之執事」

「觀皆山亭尊公咏雪之妍唱奉和呈」

「辛卯奉_レ和_レ皆山尊公元旦_ノ之嘉_一藻_二」

「奉_レ廣_二大_一僧_一正皆山尊公_ノ之歳_一首_一奇_一獨_二」

『新編覆醬拾遺』の性格は概略以上の通りである。本篇の少なからぬ部分が既知の作物であるにもせよ、その中には既知の形と異同を有する処があることもまた事実である。そして総じてこれを評するならば、少くも丈山と同じ時代を生きて、或る程度の交流のあった人物の自筆稿本という形で我々の前に出現した本書は、石川丈山新資料として、それなりの意義を有するものであらうと信ずるのである。校正用下刷本、朱筆書入れ等の存在と合せて御紹介する次第である。

以下余白を借りて幾つかの興味ある作品を掲げる。

。東大梁上人

布_一章_一合_一縫_一綿_一襪_一二_一雙_一、寅_一貢_一侍_一者_一不_レ足_レ充_レ信_一、聊_一致_一微_一忱_一、菲_一薄_一毋_レ詭_一叱_一人_一是_一荷

(これは『續集』巻十ノ七才十行目「……百不盡一原亮惟祈」とある下に右二十八字を脱しているというのである。)

。與羅山

所以_一空_一於_一敵_一邑_一獻_一香_一草_一一_一實_一、不_レ知_レ為_一楚_一人_一之_一鳳_一乎_一、為_一遼_一東_一之_一豕_一歟_一、唯_一聊_一効_一野_一人_一獻_一芹_一之_一意_一而已_一、又

(同巻十の二才四行目「……怨幸也又且」とある下に右三十七字を脱している、というものである。)

。同夜作晴

風露_一無_一光_一暗_一結_一愁_一、起_一望_一初_一霽_一賞_一中_一秋_一、雲_一間_一此_一夜_一一_一輪_一滿_一、詩_一與_一誰_一家_一有_一貫_一休_一

(これは『正集』巻二ノ一才「中秋無月」の詩と同席にして作ったものと注してある。)

。除夕

再_一々_一歲_一云_一莫_一、數_一莖_一白_一髮_一生_一、臘_一共_一三_一千_一里_一盡_一、春_一自_一三_一五_一更_一迎_一、竈_一裏_一燃_一灯_一色_一、門_一前_一竹_一爆_一聲_一、吾_一無_一詩_一可_一祭_一、讀_一易_一到_一三_一天_一明_一

(これは刊本いずれも五絶に作っているものの異伝で五律に作られているのが珍しい。)

。悼少年

只合^ニ長成^ニ断^ル袖^ノ歎^ハ、華容^先露^使、香^一魂^艶、魄^有知^否、泣^向春^風、淚^未乾

(これも刊本に見ない作である。門下の寵童を喪った時に詠じたものと見える。尚、貞享三年刊浮世草子『近代艶隠者』巻一ノ㊦に本篇を典拠すると認められる行文があるので注意している。或は何か他の本に収載されている詩なのであろうか。大方の御示教を得た
い。)

*注① 管見の及んだもの次の通り。

内閣文庫蔵甲乙二本。国会図書館蔵本。同鸚軒文庫本。宮内庁書陵部本。慶應義塾斯道文庫本。東洋文庫岩崎文庫本。都立中央図書館加賀文庫本。静嘉堂文庫本。刈谷市立図書館村上文庫本。西尾市立図書館岩瀬文庫本。京都大学図書館本。大阪府立中之島図書館本。岡山大学池田文庫本。山口県立図書館本。島原公民館松平文庫本。以上十六本。すべて同板と認む。

*注② 現西源院住職長谷川玄信氏示教

*注③ 寛文九年序刊。無刊記古活字本。六十卷三十冊。

*注④ 寛文十一年板二卷本下卷十三丁ウ。

本稿の調査に当り、貴重なる御蔵書の閲覧を御許可下された許りでなく、惜しめない御助力を賜った右関係諸機関の方々にご心より御礼申し上げます。本欄を借りて一言申し添える。

昭和五十一年九月